

## 小麦の株腐病（病原の追加）

平成 22 年 7 月に滝川市および平成 23 年 6 月にせたな町の小麦（品種：「きたほなみ」）で葉鞘部に褐色紡錘形の病斑を形成し、下位葉が枯死する症状が発生した。病斑からは単一の糸状菌が分離され、分離菌の接種により原病徴が再現された。両分離菌の菌糸は分岐を有し、分岐部がくびれ、分岐部付近に隔壁を有した。分岐は菌糸先端の隔壁の直下に生じた。菌糸幅は滝川市分離菌が 4.4~6.0（平均 5.1） $\mu\text{m}$ 、せたな町分離菌が 4.0~5.4（平均 4.5） $\mu\text{m}$ であった。

1 細胞当たりの核数は両菌株とも 2 個であった。滝川市分離菌の PDA 培地上での培養菌叢は褐色で輪紋の形成は認められなかった。せたな町分離菌は淡褐色の菌叢上にクリーム色と褐色の菌糸塊を輪紋状に形成した。rDNA-ITS 領域の塩基配列は、両菌株とも 2 核 *Rhizoctonia* AG-DI の配列と 99.2~99.5%の相同性を示した。以上の結果から、本症状を 2 核 *Rhizoctonia* AG-DI によるコムギ株腐病と同定した。*Corticium gramineum* Iketa & T. Matsuura（同種異名 *Ceratobasidium gramineum* (Ikata & T. Matsuura) Oniki, Ogoshi & T. Araki) による本病の発生は、昭和 58 年に栗山町・長沼町・札幌市ですでに確認されているが、2 核 *Rhizoctonia* AG-DI による本病の発生は、道内および国内で確認されていない。

（道南農試）



小麦の株腐病（道総研本部 三澤 原図）